

『更級日記』の物語で

- 挫折した「女の夢」 -

鄭 順 粉*

(e-mail: sunbun@pcu.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 物語と物語で
 3. 結婚と石山詣で
 4. 初瀬詣でと夢
 5. 物語での生活
 7. おわりに
-

1. はじめに

『更級日記』には、夢見る少女時代の上総国生活から、人に訪われぬ姥捨ての身を嘆くに至るまでの生涯の軌跡が、叙情的で繊細に描かれている。儼ならぬ現実ゆえに募る夢と、その夢が潰れてゆく過程は、とても切なく、十一世紀前半を生きた受領階級の女性の「女の一生」の物語として、我々に迫るものがある。

中でも、作者孝標女が見ていた夢と深い関わりのある物語では、『更級日記』の中にも多くの分量を占め、「女の一生」の脈絡を支える一大要素となっている。「女の一生」を辿るという意味では、従来同じく「家の女」—社会的な身分関係には相当なひらきはあるが—の手による『蜻蛉日記』と比較されることが多かったが¹⁾、その文学的評価はそれほど

* 培材大学校 日本学科 教授 日本古典文学

1) 『蜻蛉日記』と『更級日記』の違いについては、例えば、犬養廉 (1985) 「『更級日記』を考える—『蜻蛉日記』との関連において」(『国語展望(別冊)』44) や妹尾好信 (1989) 「王朝女流日記の執筆に関する憶説—『蜻蛉日記』と『更級日記』の場合」(『国語の研究』13)、沢田正子 (1994) 「蜻蛉日記—更級日記への揺曳」(『言語と文芸』110) などに詳細に比較考察されている。pp.1-6、pp.14-25、pp.35-68

高くなかった。例えば、物語での道中自然の風物に映発されて心情を述べる叙情的な態度において、「作者の信仰の対象が雑多散漫」で、それは「とりもおさず作者の宗教意識の散漫を意味する」²⁾と言われたり、「作家として現実を捉える、現実と取り組むという気構えが資質的に弱」く、「作品の形象化も割りに素朴すぎる」³⁾と述べられたりしたのである。

確かに、物語でに関する記事を見ると、『蜻蛉日記』のように、出来事の動的な展開がもたらされ⁴⁾、それを叙する文体の密度が高くなったり、作者の内的世界の深まりが窺われたりすることは少ないかも知れない⁵⁾。しかし、『更級日記』の中にも「女の一生」の物語として、各部分が緊密に繋がるように施された構成はあるはずである。本稿では、『更級日記』の「女の一生」を構成する重要な要素として物語でについて考察し、それが意味するものを探ってみたいと思う。

2. 物語と物語で

平安時代には、死後の極楽往生を願う浄土教が流行した一方で、この世での幸福と息災を叶えてくれる現世救済の仏に対する信仰も盛んであった⁶⁾。そうした仏とは、観音や薬師であったが、奇瑞や夢の告げによって特定の場所に祀られ、身分の上下や男女の差別なく多くの参詣人を集めた。その靈験の仏は、都から遠い山間部に祀られている場合が多く、南大和初瀬の長谷寺の観音⁷⁾や、近江瀬田川畔の石山寺の観音⁸⁾などは、多数

2) 近藤一一 (1949) 「更級日記の再吟味—その宗教意識について」 (『日本文学研究』3) pp.13-24

3) 佐山濟 (1940) 『女流日記』 (日本評論社) pp.124-131

4) 中でも、天禄二年 (九七二) 五月の鳴滝籠りは圧巻であると言われている。

5) 作品全体についても、例えば、池田利夫 (1989) 『更級日記 浜松中納言物語攷』 (武蔵野書院) には、「『更級日記』は道綱母の書いた『蜻蛉日記』に比べると全体に平穏な叙述で、激しい感情の起伏もなく、喜怒哀楽には淡白な作者像をうかがわせる」と評されている。pp.49-57

6) 例えば、石原昭平 (1996) 「平安女流日記と仏教—『蜻蛉日記』『紫日記』『更級日記』と浄土教」 (『仏教文学の構想』) には、平安時代の女流日記文学と仏教との密接な関係について述べられ、『更級日記』については、「物語に夢と憧れをもち、現実に挫折し、しのびよる末法の世に宿命観の世相を反映した」ものであると説かれている。p.60

7) 長谷 (初瀬、泊瀬) の地は、古代においてはほかの地として、平安時代から中世初期にかけては、観音信仰の地として、またその後は、伊勢詣での途次として特別な場所であった。その具体的な行程については、中嶋朋恵 (2002) 「平安時代における長谷寺参詣の行程についての研究 その一」 (『東京成徳短期大学紀要』35) に詳しく出ている。pp.11-18

8) 平安文学と石山詣での関係については、石原昭平 (1984) 「石山詣と文学—蜻蛉日記・源氏物語・更級日記をめぐる」 (『帝京大学文学部紀要』16) にまとめられている。pp.151-163

の貴族やその子女が参詣している⁹⁾。

その仏教の他に、当時貴族の間で流行したものがもう一つある。物語である。この物語は「狂言綺語」と呼ばれ、道から外れた作り事として軽蔑されていた。狂言綺語の「狂言」とは、仏の説いた「実語」に対して、道理にはみ出す語と、巧みに言辞を飾り立てて人を楽しませるのが狙いの語をさす。仏教の立場から文学や芸能などを指している言葉である。「綺語」は、『無量寿経』下で「両舌・悪口・妄語・綺語をもって、讒賊し鬪乱す。善人を憎嫉し、賢明の人を敗壞す」として、悪の一とされた¹⁰⁾。

平安中期は、末法思想—釈迦の入滅後二千年経つと、法は失われて世は乱れ、疫病や戦乱が流行り、世界は混沌とするという思想—が世を支配し、貴族たちは現世的な物語を斥き、浄土教の世界に身を浸ろうとしていた。そのような時代的な背景の下に成り立った『更級日記』には、幼い頃から物語に夢と憧れを持ち続けた作者孝標女が、厳しい現実挫折し、信仰（浄土教）の世界に救いを求めようとする過程がよく表わされている。そして、その物語の世界から信仰の世界への移行は、頻繁に行われる物語によって具象化される¹¹⁾。

『更級日記』における物語で年代順に記してみると、次のようになる。

- ① 長元五年（一〇三二）の太秦ごもり（作者二十五才）
- ② 長元八年（一〇三五）の清水ごもり（作者二十七才）
- ③ 寛徳三年（一〇四五）の石山詣で（作者三十八才）
- ④ 永承元年（一〇四六）の初瀬詣で（作者三十九才）
- ⑤ 永承二年（一〇四七）の鞍馬詣で（作者四十才）
- ⑥ 同年（永承四年の説もある）の再度の石山詣で
- ⑦ 永承三年（一〇四八）の再度の初瀬詣で（作者四十一才）
- ⑧ 具体的な年次不明の再度の太秦ごもり

①と②は、まだ物語の世界に浸っていた頃のものである。①の太秦ごもりは、物語的な

9) 特に女性たちが物語で熱心だったが、当時女性と仏教（浄土教）との密接な関係については、石原昭平（1996）の前掲論文に詳しい。pp.60-82

10) 唐の白楽天が、香山寺に自著の『洛中集』を納める時、「我に本願あり、願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の過ちを以て、転じて将来世世讚仏乗の因、転法輪の縁となさんことを」（『白氏文集』11）とこの語を使用してから、犯戒の行為が逆に功德を積むこととして肯定されることになった。日本でもこの思想を反映した文学作品が出現し、平安中期以降は、歌合が法会へと移行するなど、和歌を含む文芸は、仏教と結縁を結び、神と仏に捧げられようになる。

11) しかし、平安時代以降になると、和歌や物語が逆に仏教の修行に繋がりを助けるのではないかという考え方が発生した。十二世紀の後白河天皇などはその擁護者としての代表格である。

理想の人生への希望が「親となりなば、いみじうやむごとくわが身もなりなむ」という考えによって支えられていた頃のもので、長元五年（一〇三二）常陸介に任じた父の無事を祈っていた。②の清水詣でも「例のくせは、まことしかべいことも思ひ申されず」という状態で、自分や僧の夢見も深く考えない不信仰が続いている。それに対して、③から⑧までは、結婚後、物語への憧れを反省してから行った物語である。長久元年（一〇四〇）同じく受領階級の源俊通と結婚した作者は、もう物語のような人生は望めないことを自覚する。そこで、③の石山詣では、過去の不信仰を改め、見た夢をよいことと思い、行いで夜を明かす。また、④の初瀬詣では、後冷泉帝の大嘗会の御禊の日に仏の御験があることを信じて出発を敢行する。その後、⑤から⑧までは、断続的に続いた物語であるが、そこには物見遊山的な面が見られ、祈願を目的としつつも日常を脱し、非日常性を求める余裕が感じ取られる。

このようにして『更級日記』における物語でを全体的に眺めてみると、結婚というものが大きな節目となっており、結婚後に物語でが本格化することが分かるが、その直前に、三年にわたる資通との出会いと別れが語られるのは、注目に値する。

長久三年（一〇四二）三十五歳、十月初旬一俊通との結婚二年後で、前年夫は下野守に任ぜられて下向中と思われ一仕出先の祐子内親王家で不断経が開かれた夜、同僚の女房といるところへたまたま訪れた資通と春秋優劣の語らいに一夜を過ごした¹²⁾。木の葉にかかる時雨の音、声よき僧の読経の声、情趣に包まれた宮廷の一隅で、ひそやかに繰り広げられた理想的な貴人との逢瀬は、『源氏物語』に憧れた作者にとって、ただ一度訪れた物語の世界の出来事のような甘美な体験であった。四季の風情や人の世の「あはれ」について語り興じたばかりのことで、恋と呼ぶにはあまりに儂い出会いであったが、資通の落ち着いた物静かな態度や、世間にありがちな好色めいたそぶりのない人柄は、「世のつねならぬ人」として強烈に脳裡に焼き付けられた。日記の執筆時からすれば十七、八年も昔のこの出来事を、作者は今起きたばかりのこのように詳細克明に哀惜を込めて書き記している。少女の頃から抱き続けた夢想も次第に消散しつつある、いや捨てざるを得ない三十五歳、しかも身のほどに合ったとはいえ、物語世界とはおよそ無縁の男俊通との現実的な結婚をして二年目。思いがけず訪れた夢のような陶醉の一夜は、翌年、翌々年と余韻を残しながらも再現されることはなかった。資通との邂逅譚を記し終えた直後、彼女は「今は、昔のよなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて」―後に詳述する―

12) この資通との出会いの場面については、従来「物語的なもの」と見られ、例えば、和田律子（1995）「『更級日記』における宮仕えの記をめぐって」（『立教大学 日本文学』74）には、「源資通は実在した人物であるが、孝標女は、その実在の人物を借りながら、作品に思いどおりの架空の貴公子に描き出した」とする。資通との出来事が実際あったかどうかは判明しがたいが、資通が物語の中の男主人公のような人物であったことは確かであろう。p.14

と、物語世界に耽溺し、作中人物にわが身をなぞらえてきた浮薄な心を反省し、現実生活の中に堅実な幸せを築こうと考えるようになる。物語志向から反動的に信仰世界に向かうかのように、頻繁な物語でを繰り返すようになるのである。資通との出会いの一段は、夢想世界への訣別の代償にあたる最後の甘美な現実世界だったと考えるべきである。

資通との出会いは作者の人生、特に精神生活において大きな節目となったはずで、これを境に夢想の人生に一応の終止符を打ち、現実的な家庭生活の安泰を求めていくようになったと思われる。

3. 結婚と石山詣で

物語の中の貴公子のような資通との邂逅がむなしく終わった後、孝標女は、物語憧憬の昔の生活を後悔しながら、物語でに本格的に出るようになる。それが③の石山詣である。石山寺が、パワースポットと言われる所以は、鎌倉時代末期に描かれた『石山寺縁起』によっても確認されるが¹³⁾、平安時代から、願いを叶えてくれる本尊の如意輪観音の力にすがるとともに、京の都から貴族の女性たちがたくさん訪れていた¹⁴⁾。孝標女も、寛徳二年（一〇四五）三十八歳の時、石山寺に詣でる。『更級日記』の本文を見てみよう。

今は、昔のよなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身も三倉の山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、石山に参る。雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしく思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

逢坂の関のせき風ふく声はむかし聞きしにかはらざりけり

(三三九頁) 15)

この頃、作者は物語でに連れて行ってくれなかった親を恨むほど物語でに対する熱意が

13) 『石山寺縁起』によれば、『蜻蛉日記』は石山寺の観音の力によって夫の愛情を取り戻した靈験譚になっている。

14) 『蜻蛉日記』『枕草子』『和泉式部日記』『更級日記』などの文学作品に登場し、『源氏物語』の作者紫式部は、石山寺参籠の折に物語の着想を得たとする伝承がある。

15) 『更級日記』の本文引用は、新全集本による。頁数や段数もそれに従う。以下、同様。

強くなっていた¹⁶⁾。しかも、十一月の真冬に京から近くない石山寺に詣でをするほど、真剣になっている。石山詣でに出る理由、すなわち目的については、本文の中に二つの項目があげられている（引用文の下線部）。財をなしてわが子を立派に育て上げることと、自分の後世の往生することである。

では、作者は何故このように願うようになったのであろうか。本文の中には具体的に表わされていないが、実は作者の身の上に大きな変化が二つあった。まず、作者の「よしなし心」を長年下支えしてきた父孝標が寛徳元年（一〇四四）に死去したのである¹⁷⁾。頼りにしてきた父を亡くした作者は、長年物語に没頭してきた自分を深く反省し、一年間の服喪期間を終えた後、生前に物語でに同伴してくれなかったことを恨みつつ猛然と物語でを開始したと思われる。その際、「今はひとへに豊かなる勢ひになり」と現世利益を第一に希求して石山詣でに出かけているのは、父親の死により現実生活の面での支えを失ったからであろう。この段階ではまだ夫俊通は作者を充分庇護するまでに至っていなかったと思われる。そして、もう一つの身の上の変化は、「ふたばの人」¹⁸⁾の誕生である。作者はおそらくこの年に出生したと思われる第一子「ふたばの人」を抱えて、ひたすら仏にすがる他ないつらい状態にあったのである。

雪の道中、作者は物語への憧れに胸ときめかせて上京し相坂の関を越えた少女の日を思い出す。物語を読みたいという一心で京に向かったあの頃と、結婚と出産を経つつ現実的な幸せを願って石山に向かう今とがおのずと心の中で重なる。「逢坂の」の歌における、風の音が不変であるという詠嘆には、我が身の変化に対する感慨が潜んでいる。

父の死亡と子供の誕生という現実的な状況の下で、作者はせっぱ詰まった心境で冬の寒さをこととせせず石山寺を訪れる。そして、京からの長旅の疲れも忘れて、人声もせず、山風が恐ろしく感じられる御堂に登って行いをする。しかし、長旅の疲れが出たのか、つい微睡んでしまう。その夢の中に、「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」の啓示を得るようになった。中堂は本尊の如意輪観世音菩薩像がいる場所のことであり、麝香は麝香鹿の雄の腹部にある袋から作られる香料で、当時珍重された。それを良きことであると信じた作者は、一所懸命に勤行に打ち込むのである。無関心だった夢を真剣に考えるようになった作者の大きな変化がここに認められる。作者はこの石山詣でで得た夢の啓示をよきことと確信し、京に帰ってくるのである。

16) 以前、父孝標が常陸国に赴任している間、母は「初瀬には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいかかせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はざる山、率て出でむいとおそろしや。親上りて、ともかくも」と言って、作者をつれて行ってくれなかった。

17) 安藤重和(1986)「『よしなし心』の終焉と孝標の死」(『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』右文書院)に詳しい。pp.37-44

18) 日記の後半部に出る仲俊であろう。

では、ここで一つ疑問が浮かび上がる。作者が行いで祈願したのは具体的に何だったのか、というものである。財が蓄積し、生まれた子と自分の幸福が保証されることは、いったい何をさすのだろうか。それは、自分が貴人の子の乳母になることをさすのではないだろうか。平安時代、天皇の子供（皇子や皇女）の乳母になることは、中流貴族の女性にとっては一つの夢であった。乳母は貴人の子供に乳を与えるだけでなく、教育も担当する、特別な存在である。もし、乳母を勤めた皇子が天皇の座に上がると、乳母は後宮女官の典侍（内侍所の次官）の位を賜ることになる。また、乳母の実子は乳母子といって養い子とは乳兄弟になる。乳兄弟は、血縁関係ではないが、同一人の乳を飲むことによって、特別に強く連帯感を持つようになる。乳母の実子も、乳母のように、乳兄弟である皇子が天皇になる場合は、出世が保証されるのである¹⁹⁾。

この時期に生まれた「ふたばの人」は、日記の後半部に登場する仲俊、すなわち男の子であると考えられる。孝標女がもし皇子の乳母になったら、仲俊は将来天皇の側近として官職につく可能性が大きくなるのである。

石山詣では、『更級日記』に出てくる最初の本格的な物語で、物語に心を奪われたことを反省し、現世での幸福を願って思い立ったものである。その石山詣でで得られた吉兆の夢に作者は再び夢や期待を抱くようになる。

4. 初瀬詣でと夢

石山詣でから一年後の永承元年（一〇四六）、作者三十九歳の秋、前年、後朱雀天皇が退位され、代わって後冷泉天皇が即位される。また、それによる大嘗会があり、十月二十五日にはそれに先立って天皇が賀茂川で斎戒をする大嘗会御禊が執り行われた。天皇の即位後一世一度の晴儀で、盛大な行列は世間をあげての関心事であった。ところが、作者はこの御禊の当日に都を後にして初瀬詣でに出発するのである。④の初瀬詣でである。初瀬は、今の奈良長谷寺で、十一面観世音を本尊とする観音信仰の霊地として平安時代に石山寺と並んで貴族女性の物語のできる数少ない聖地であった。しかし、それにしても、作者の様子はやや常軌を逸したものであった。

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊の精進はじめて、その日京を出づる

19) 同じ時期に、紫式部の娘である大式三位も、後冷泉天皇の乳母となり、殊遇をうけて従三位典侍となった。『枕草子』の中にも、「身をかへて、天人などはかうあらむと見ゆるものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる、唐衣も着ず、裳をだにもよう言はば着ぬさまにて、お前に添い臥し、御帳の内を居所にして、女なども呼び使ひ局にもの言ひやり、文を取り次がせなどしてあるさま言ひい尽くすべくもあらず」（二二一段）と、皇子や皇女の乳母の豪勢ぶりが描かれている。pp.106-107

に、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎せかいの人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でていかむも、いとものぐるほしく、ながれての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人はいひ腹立てど、兎どもの親なる人は、「いかにもいかにも心にこそあらめ」とて、いふにしたがひて、出だしたつる心ばへもあはれなり。

ともに行く人々も、いとみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ志を、ざりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思ひ立ちて、その暁に京を出づるに、二条の大路をしも渡りて行くに、さきに御明かし持たせ、供の人々浄衣姿なるを、そこら、棧敷どもにうつるとて、行きちがふ馬も車もかち人も、「あれはなぞ、あれはなぞ」と、やすからずいひおどろき、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。良頼の兵衛督と申し人の家の前を過ぐれば、それ棧敷へ渡りたまふなるべし。門広うおしあけて、人々立てるが、「あれは物詣人なめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」とまめやかにいふ人一人ぞある。(三四一～三四二頁)

何も今日に限らなくとも、他に日もあろうに、御禊当日に強引に出発しようとするのは、まさに狂気の沙汰で突飛な行動であったし、作者の執念には恐怖さえ感じさせる気迫がある。兄弟は世間の物笑いのたねだと猛反対するが、夫俊通だけは出発に同意してくれる。

当時の御禊については、例えば『源氏物語』「葵」においては、葵上と六条御息所とが車争いをしたのが、新斎院の御禊の行列を見物するために物見車を一条大路に立てようとした場面である。また、『栄花物語』「はつはな」には、寛弘二年(一〇〇五)に道長が斎院御禊と賀茂祭使になった頼通の一行を一条大路の棧敷の中で多くの公卿らとともに見物する場面が出ており、御禊の当日の混雑ぶりが記されている²⁰⁾。

『更級日記』の中にも、御禊の行列の様子を見物するために設けられた棧敷に入ろうとする人々の姿が描かれている。洛外の田舎人たちがまるで水の流れるように見物のために上京し、浄衣姿の孝標女の一行とすれ違いながら、「あれはなぞ、あれはなぞ」と呆れ、嘲笑する者たちもいた。

作者が当日出発したのは、偶然のことではなかった。「大嘗会の御禊とのしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づる」とあるように、世間がわき返っていることを承知の上で、初瀬詣でのための精進を始め、当日京を立ったのである。すなわち、彼女は始めから御禊の日をよく知っており、その日にあてて精進をし出立したわけである。しかも「二条の大路をしも渡りて行く」と御禊の行列が通る二条大路をあえて選んでいるところには、挑戦

20) 「殿は、一条の御棧敷の屋長々と造らせたまひて、椀皮葺、高欄などいみじうをかしうせさせたまひて、この年ごろ御禊よりはじめ、祭を殿も上も渡らせたまひて御覧するに、今年使の君の御事を、世の中揺りていそがせたまふ」。山中裕他(1995)『栄花物語』(新編日本古典文学全集 小学館) pp370-371

的な気配さえ感じられる。作者がよりによってこの日を物語でのための出発日に決めたのは、いったい何故であろうか。日記本文には、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ志を、さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と世間のお祭り気分には浮わつかないで、固い決意で物語でにつき進む信仰への熱意を、仏はきっと殊勝なことと感心するに違いないと信じ、その利益が現れることを期待していると述べている。誰もが楽しみにしているめでたい行事の見物を我慢して、あえて物語でに出かけることで、信仰の志の強さを仏に汲んでもらいたいというのである。

では、そこまで切実に仏の功德を望む本当の理由は何だったのであろうか²¹⁾。

前年の石山詣での折には「ふたばの人」と言って「ふたばの人ども」などとは言っていなかった。ところで、今回の初瀬詣での際は、自分の夫のことを「兄どもの親なる人」と言っている。すなわち、石山詣でからこの初瀬詣でまでの間に第二子の妊娠出産があり、この第二子出産のことが初瀬詣での真剣さに拍車をかけているのではないかと思われる。一年近く物語での空白期間が生じているのもその理由からであると見られる。前年の石山詣での際は、「今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおぼしたて、我が身も、三倉の山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむ」と、自分より子供の将来と幸福を優先させていた。第二子が誕生した今は、子供の母としての責任感がより強くなっていったものと見られる。作者の非常識的な初瀬詣でに夫の俊通だけは賛成してくれたのも、そのような背景があったからではないだろうか²²⁾。作者は、周りの反対や嘲笑を振り切って、遠い初瀬を向って黙々と進むのである。三条にある家から出発し、「二条大路一良頼という人の家の前一三条大橋一法性寺一宇治一関白頼通の宇治殿一やひろうち一栗駒山一贅野の池一下衆の小家（一泊）一東大寺一石上神社」を経て、山辺の寺で一泊し、初瀬川の向うにある初瀬（長谷寺）に到着する²³⁾。

21) その理由について、福家俊幸 (2000) 「『蜻蛉日記』から『更級日記』へ—初瀬詣で」(『中古文学論攷』20) においては、両作品の共通性を見出し、自ら皇権に関与できない不如意な現実に対する反発であると見ている。また、鈴木紀子 (2002) 「藤原道綱母から菅原孝標女へ—利用された大嘗会の御禊の意味」(『京都の女性史』) においては、「強引な初瀬行は、夫に対する声にならない叫びであり、悲痛なメッセージ」であったと言う。両論ともに緻密な論証に基づいた意見であるが、夫との仲がそれほど険悪ではなかったと思われる。pp.320-325, pp.35-50

22) 秋山虔 (1980) 『更級日記』(新潮日本古典集成)の頭注に、「一世一代の見物、大嘗会の御禊の騒ぎに背を向けて初瀬詣の旅に出てゆく作者の心は、善根功德を積もうとする異常な熱意に燃えていたと一応いえようが、一方では、現実の日常的な自己に対する自虐的ともいべき反乱を読みとることができる。非日常的空間へと自己を押し出してゆく、この片意地なまでの行為こそが、別世界との清新な触れあいを可能ならしめたのであろう」と述べており、「旅の非日常性」を強調するが、ここではそれより重要な問題と思われる主観的な側面から見ているのである。pp.94-95

23) このように初瀬にいたる旅程が詳しく確実に記されていることについて、西本貞 (1976) 「菅原孝標女の物語でと夢について—更級日記ノートV」(『日本文学研究(高知日本文学研究会)』14) には、まさに紀行文学の方法であり、作者の主観的な行動の表わしであると述べられている。pp.81-88

つとめてそこを立ちて、東大寺に寄りて拝みたてまつる。石上もまことに古りにけること、思ひやられて、むげに荒れはてにけり。その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓へなどして上る。三日さぶらひて、曉まかむとてうちねぶりたる夜ざり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。

(三四四頁～三四五頁)

長い旅程を経て辿り着いた山辺の寺で作者は相当疲れていたにもかかわらず、懸命に経を読んでから休んだ。そんな作者の夢にある女性が現れる。その女性は、「いみじくやむごとく清らなる女」であり、かつて作者の母が作者の未来のために初瀬へ僧を代参させた際、その僧の夢に現れた「いみじう気高う清げにおはする女」と意味的にほぼ同一である。

その女性が初瀬代参僧の夢において、御帳の方から登場しており、初瀬の観音の化身と考えるとよいだろうが、この初瀬の観音の化身と思しき女性はかつて、作者に禍福両様の運命を示していた。ところが、今は、「そこは内裏にこそあらむとすれ」と作者の運命をよき方に限定して言っている。この予言は、初瀬代参僧を通じて示された鏡の吉凶二影のうち「御簾ども青やかに、几帳おし出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木づたひ鳴きたる」吉影に通じるものであることが明らかである。これを聞いた作者が「うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつ」という有頂天の様相を呈しているのも当然と言えよう。

そして更に初瀬の観音は、宮中出仕の具体的な方策について「博士の命婦をこそよくかたらはめ」とまで親切に指導しているが、ここに言及された「博士の命婦」とは宮中内侍所に祭られる天照御神に奉じする女性として長久三年（一〇四二）条に登場した人物である。これは、作者の祈願する具体的な内容が、石山詣でのそれと同様であることを示すのではないだろうか。すなわち、この初瀬詣では、二人目の子を出産したこともあり、皇子や皇女の乳母になって宮中に勤めることを強く望んでいた作者に大きな希望を持たせる決定的なきっかけになったと思われる。

5. 物語での生活

さて、この初瀬詣で記事の後には、次のような作者の断り書きが置かれる。

二三年、四五年へだてたることを、次第もなく書きつづれば、やがてつづきたちたる修行者めきたれど、さにはあらず、年月へだたれることなり。 (三四六～三四七頁)

そして、再び物語で記事が列記される。⑤「春ごろ」の鞍馬詣でと「十月ばかり」の鞍馬詣で、⑥「二年ばかりありて」の再度の石山詣で、そして⑦再度の初瀬詣でと、⑧具体的な年次不明の再度の太秦ごもりとが続けて記される。

ところで、これらの一連の物語で記事は、第一回石山詣で(③)や第一回初瀬詣で(④)の記事に比していずれも極端に簡略なものとなっていることに気づく。記事内容に関しても物見遊山的な興味に従って道中の有様を描出するもののみで、物語で記事にとって最も重要である夢の啓示や勤行については一切言及していない²⁴⁾。第一回石山詣での折の「相坂の関」「関寺」「打出の浜」に関わる記述においても、物見遊山的な面はあった。また、第一回初瀬詣での折に「宇治の渡り」で『源氏物語』の宇治の姫宮たちを思い「宇治殿」で浮舟の女君のことを思う作者の姿からは信仰を二の次にして物語的な興味に心を奪われている様子が窺われる。しかし、それだけに終始してしまうのではなく、そこには懸命に物語で打ち込む作者の姿が印象深く描き込められていた。しかし、上記の断り書きの部分以下に列記される記事の中からはそのように懸命な作者の姿を認めることは不可能である。断り書きを境に記事の内容が変化していると言わざるを得ない。

この物見遊山的な物語でにおいて、作者は夢の啓示を得ることに関心はないらしく、既に示された夢の啓示の実現を祈るものとして見ることができる。作者は、祐子内親王家への出仕が絶えた理由について、次のように述べる。

世の中にとにかくに心のみつくすに、宮仕へとても、もとは一筋に仕うまつりつかばやいか
があらむ、時々たち出では、なになるべくもなかめり。年はややきだ過ぎゆくに、若々しきや
うなるも、つきなうおぼえならるうちに、身の病いと重くなりて、心にまかせて物語でなどせし
こともえせずなりたれば、わくらばのたち出でも絶えて、長らふべき心地もせぬまに、幼き
人々を、いかにもいかに、わがあらむ世に見おくことがなと、臥し起き思ひ嘆き、たのむ

24) 孝標女の物語でが、基本的には物理的に狭く閉じられた空間から開放されるためのものであったことについては、増田繁夫(1994)「心身のリクレーションとしての物語で」(『月刊国語教育』14-4)や標ゼミ(1988)「旅と女性」(『緑聖文芸』19)、遠藤真知(1997)「平安女流日記文学における“旅”」などに詳しく説かれている。pp.92-95、pp.57-65

人のよろこびのほどを、心もとなく待ち嘆かるるに、秋になりて待ちいでたるやうなれど、思ひしにはあらず、いとほいなくちをし。
(三五四頁～三五五頁)

作者は、重病になったので出仕が絶えた、とは言っていない。「身の病いと重くなりて」というのは「心にまかせて物詣でなどせしこともえせずなりた」ることの理由付けとして示されているに過ぎず、「わくらばのたち出でも絶えて」の理由としては「心にまかせて物詣でせしこともえせずなりたれば」が直結されていると見るべきである。宮家への「わくらばのたち出で」とは、第一回初瀬詣で(④)の途上初瀬の観音の化身らしき女性によってなされた「そこは内裏にこそあらむとすれ」という夢の啓示を実現するための足がかりとしての意味を有していると推定されるが、作者はここで「物詣で」を「えせずなりた」ることによりその足がかりを失うことになったと述べているのである。すなわち、作者が「心にまかせて物詣でせし」目的は好ましき夢の啓示の有効性を保持する点にあったわけで、そうならば、「物詣で」は、やめずに繰り返すことに意義があるわけで、一つ一つの物詣での内容自体を詳細に叙さずとも良いし、物詣での順序を問題にする必要もなくなる。物見遊山的な物詣での記述が、「二三年、四五年へだてたることを、次第もなく、書きつづく」という実に大雑把な形でなされている理由はこの辺りにあったのである²⁵⁾。作者はもはや題材の選択など一切しなくなり、いわば身辺雑記的に、関心のいたるまま、筆のおもむくまま、非日常的な事態であったが故に記憶の裡にとどまっているといった類の事柄ばかりを拾い上げ、綴り合わせてすまそうとする態度になってしまっている。しかし、この場合も、作者は、総体的に幸福ではなく、思いのごとき人生ではないことや祈願のごとくならないことを嘆いている様子が看取される。

結局、物語世界に打ち込んでいた自分を悔い改めた後の物詣で記事の中で、第一回石山詣で(③)と第一回初瀬詣で(④)は、夢の啓示を求めて懸命に行われた物詣でとして、そして「二三年、四五年へだてたることを云々」という断り書き以下に記される鞍馬詣で(⑤)から第二回初瀬詣で(⑦)や年次不明の再度の太秦ごもり(⑧)までの部分は既に示された夢の啓示の有効性を保持しその実現を祈るものとして、作者の内部で区別されていたと思われる。つまり、第一回石山詣で(③)と第一回初瀬詣で(④)は、作者が未来に対する夢—それは具体的には乳母になって自分と子供とが両方出世すること—を持たせて胸を弾ませた契機として働いているが、その後の物詣では、時間が経つにつれ、だんだん薄くなっていく夢の実現可能性に嘆息しつつも、まだ夢に対する期待感を捨てきれない作者の心境を投影するものになっているのである。

25) 石原昭平(1984)の前掲論文においては、「作者は道綱母ほどには、参詣がその人生の危機を救済したように記さない。しかし、夢を信じ、観音の尊さを信ずることにおいては、道綱母より以上に素直であったようだ」と述べられている。p.160

6. 物語でと「女の夢」

以上のように見てくると、物語でが作者の一生の中で如何に大きな意味合いを有するかが確認されるが、物語の世界に対する反省をこめて物語でに打ち込む最も大きなきっかけはやはり結婚であったことが明らかになる。

孝標女の夫俊通は、但馬守橘為義の四男で、母は讃岐守大江清通女である。孝標女よりは六歳の年長に当たる。為義男と言えば、為仲・資成・義清ら後拾遺歌人もいるが、俊通自身は勅撰集に一首の入集もなく、日記中にも、作者との贈答が一首も見えない。能吏ではあっても、風雅とはほど遠い人物を思わせる。俊通は、長年思い描いてきた、物語中の男君とは、およそ似げなき人物であったのである。親の措置によって突然結婚せざるをえなかった作者は、結婚直後に次のように述べる。

その後はなにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ忘れて、ものまめやかなるさまに、心もなりはててぞ、などて、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物語でもせざりけむ。このあらましごとととも、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。いかに、よしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはず。
(三二九頁)

それまでの物語への傾斜を反省しつつ、この世の中には、光源氏のような素晴らしい人は存在しないし、薫が宇治に隠しておいた浮舟も実際にはいないと言うのである。ここには、長年育ててきた夢が結婚とともに足下から崩れ去ったことに対する作者の自省と慨嘆とが込められている。

『更級日記』の中に、夫との仲をかこつかに見えるのは、わずかに「世の中むつまじうおぼゆるころ」（六九段）、「世の中に、とにかくに心のみつくすに」（七三段）の二カ所のみであるが、これはむしろ作者の結婚生活の底流をなすものではなかったのか²⁶⁾と思われる。不和でないまでも共感に乏しい夫との生活は暗く淀んだものだったのであろう。しかし、彼女はこの夫の下を去って、和泉式部や相模のように、はたまた継母大輔の如く女房になる道は選ばなかった。彼女はむしろこの夫との妥協的な生活によって物質的な安定と子供の将来を願い続けてきたのである。それが、自分の子供を儲けることによって皇子や皇女の乳母になる願いを抱くことだった。夫は、作者が如何に無理な物語でを言い出しても理解し、

26) 作者の夫婦関係については、吉岡曠(1929)「更級日記の『浪漫的精神』」(『国文学』10-14)には、「安定した、無事な結婚生活であった」とあり、安貞淑(2001)『更級日記の研究』(翰林書房)には、「円満が少なくとも不幸だったとは思われない」とある。p.21、p.78

経済的な支援を惜しまなかった。それは、作者自身も満足に思うところであった。ところで、突如康平元年（一〇五八）作者五十一歳の時、夫の死が突如としておとずれる。

かへる年の四月に上り来て、夏秋も過ぎぬ。

九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふ心地、世の中にまたたぐひあることもおぼえず。初瀬に鏡奉りしに、臥しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は、来しかたもなかりき。今ゆく末は、あべいやうもなし。二十三日、はかなく雲煙になす夜、去年の秋、いみじくしたてかしづかれて、うち添ひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上に、ゆゆしげなる物を着て、車の供に、泣く泣く歩み出でてゆくを、見出だして思ひいづる心地、すべてたとへむかたなきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見にけむかし。 (三五六頁～三五七頁)

あまりの悲しみに崩れ落ちる作者であるが、作者の悲しみの対象は夫その人ではなかった。日記において夫が取り上げられる場合は、ほとんど子供との関連においてである。夫の葬式の際も、哀れに思う対象は、夫ではなく遺児仲俊になっている。妻にとって夫の死が悲しくないはずはあるまいが、この作者の日記では、夫の死に対する哀惜もさることながら、その死によって、子供をも含めた彼女自身の人生が危うくも消え去ってゆくことへの悲嘆で染め上げられているように見える。夫の死は、みずから択びとった妥協の無惨な敗北を意味するものであったが、作者は、夫との妥協的な生活の中で、いったい何をひそかに望み続けていたのか、次の述懐部分を見てみよう。

昔より、よなし物語、歌のこをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどしてただよふ。 (三五七頁)

作者は、少女時代以来のよなし心や信仰を疎かにしなかったら、この夢のような儂い世を見ないですんだと悔恨する。夢を見てから勤行に励まなかったことを今の不幸の原因とするのである。そして、ここで心中を打ち明ける。長年「天照御神を念じたてまつれ」と見た夢は、皇子や皇女の乳母になり、宮中に出仕して帝や後の庇護を受ける身になることを意味するといっているのである。それは、まさに初瀬代参僧の夢で鏡に示された吉影と一致するもので

あった。

つまり、物語では、結婚しても相変わらず宮中に憧れを持ちつづけた作者にとって、皇子や皇女の乳母になって自分だけでなく子供にも出世の道を開いてくれる夢を抱かせた媒介体ではなかっただろうか。結婚して宮中に出仕し出世することは、皇子や皇女の乳母になることであって、夫の死は作者にとってその夢の終焉を意味するものだったのである²⁷⁾。

物語や歌にかまけて信仰を疎かにし、夢告も当たらず高貴な人の乳母になれなかった作者は、夫も亡い今生きる拠り所とてなく、まさに何もかも叶ったものがない人になっている。乳母願望を求めた信仰生活は結婚後始まったものであり、この絶望の言葉は、結婚直後にそれまでの物語願望が破れて詠んだ歌「幾ちたび水の田芹をつみしかは思ひしことのつゆもかなはぬ」と時間的に連続し、絶えず何かを追求するがそれが叶わない人生、という『更級日記』を貫く構造を浮かび上がらせる。そして更に注目すべきは、その追求が常に物語でを手段としていたことである。

7. おわりに

『更級日記』には、少女時代『源氏物語』や様々な物語の世界へ憧れていた作者が、宮仕え・結婚・子供の母などの現実の厳しさを経るうちに、次々と夢が破れていく過程が綴られている。中でも、三十三歳ごろの俊通との結婚は、作者が物語世界と現実世界との間に大きな隔りがあることを気づききっかけとなる。作者は次第に現実的な考えを抱くようになり、子供の養育や夫の栄達を願うようになる。そして、その願いのために、いろいろな所へ物語でをする。しかし、その物語では、単に信仰生活のためのものではなかった。それには、子供や自分の将来を保証してくれる具体的な内容が含まれていた。作者は、宮中に入り、皇子や皇女の乳母になることを祈願していたのである。物語では、いわば物語の夢が挫折した後、もう一つの夢を育ませてくれる媒介体だったと考えられる。

しかし、その夢もやがては実現せずに終わってしまう。そして、慎ましい最後の夢が潰え去った中で、残されたものはただ一つ、弥陀来迎の夢である。彼女は「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」と書きとどめているが、しかし言葉とは裏腹に、この夢すら老残の彼女にど

27) 「女の一生」を書き綴る中で、物語で大きな意味合いを持っている作品としては、ほかに『蜻蛉日記』があるが、『蜻蛉日記』の場合は、物語でが作者の道綱母の人生の危機を救済したことをよりドラマチックに描く。『蜻蛉日記』には、夫兼家との假ならぬ関係という現実から逃れようとする道綱母の意志や欲望が強く示されており、それだけ道綱母の現実に妥協できない自我を反映している。それに比べると、『更級日記』の孝標女は、現実に順応しながらも心の中で夢を育てていくための拠り所として物語でを描く。『更級日記』の物語でがより信仰世界や現実世界に素直であり、自省や悔恨という日記本来の特徴がよく表わされていると言える。

れほど救いたり得たであろうか。彼女は「かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどして」漂いながら、過去を哀惜、はるかにかすむ上総国時代から回想の手記を紡ぎ出してゆくのである。

【参考文献】

- ・ 犬養廉(1994)『更級日記』(新編日本古典文学全集小学館) p.329、p.339、pp.341-342、pp.344-345、pp.346-347、pp.354-355、pp.356-357
- ・ 秋山虔(1999)『更級日記』(新潮日本古典集成 新潮社) pp.94-95
- ・ 木村正中(2000)『蜻蛉日記』(新編日本古典文学全集 小学館) pp.224-254
- ・ 石田穰二(1993)『枕草子』(角川文庫 角川書店) pp.106-107
- ・ 山中裕他(1995)『栄花物語』(新編日本古典文学全集 小学館) pp.370-371
- ・ 犬養廉(1985)「『更級日記』を考える—『蜻蛉日記』との関連において」(『国語展望(別冊)』44) pp.1-6
- ・ 妹尾好信(1989)「王朝女流日記の執筆に関する憶説—『蜻蛉日記』と『更級日記』の場合」(『国語の研究』13) pp.14-25
- ・ 沢田正子(1994)「蜻蛉日記—更級日記への揺曳」(『言語と文芸』110) pp.35-68
- ・ 近藤一一(1949)「更級日記の再吟味—その宗教意識について」(『日本文学研究』3) pp.13-24
- ・ 佐山濟(1940)『女流日記』(日本評論社) pp.124-131
- ・ 池田利夫(1989)『更級日記 浜松中納言物語攷』(武蔵野書院) pp.49-57
- ・ 石原昭平(1996)「平安女流日記と仏教—『蜻蛉日記』『紫日記』『更級日記』と浄土教」(『仏教文学の構想』) pp.60-82
- ・ 中嶋朋恵(2002)「平安時代における長谷寺参詣の行程についての研究 その一」(『東京成徳短期大学紀要』35) pp.11-18
- ・ 石原昭平(1984)「石山詣と文学—蜻蛉日記・源氏物語・更級日記をめぐる」(『帝京大学文学部紀要』16) pp.151-163
- ・ 和田律子(1995)「『更級日記』における宮仕えの記をめぐる」(『立教大学日本文学』74) p.14
- ・ 安藤重和(1986)「『よなし心』の終焉と孝標の死」(『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』右文書院)に詳しい。pp.37-44

- ・ 福家俊幸(2000) 「『蜻蛉日記』から『更級日記』へ—初瀬詣で」(『中古文学論攷』20) pp.320-325
- ・ 鈴木紀子(2002) 「藤原道綱母から菅原孝標女へ—利用された大嘗会の御禊の意味」(『京都の女性史』) pp.35-50
- ・ 西本貞(1976) 「菅原孝標女の物語でと夢について—更級日記ノートV」(『日本文学研究(高知日本文学研究会)』14) pp.81-88
- ・ 増田繁夫(1994) 「心身のリクリエーションとしての物語で」(『月刊国語教育』14-4) pp.92-95
- ・ 標ゼミ(1988) 「旅と女性」(『緑聖文芸』19) pp.57-65
- ・ 遠藤真知(1997) 「平安女流日記文学における“旅”」 pp.39-56
- ・ 吉岡曠(1929) 「更級日記の『浪漫的精神』」(『国文学』10-14) p.21
- ・ 安貞淑(2001) 『更級日記の研究』(翰林書房) p.78

要 旨

『更級日記』には、夢見る少女時代の上総国生活から、人に訪われぬ姥捨での身を嘆くに至るまでの生涯の軌跡が描かれているが、中でも、作者孝標女が見ていた夢と深い関わりのある物語では、『更級日記』の中でも多くの分量を占め、「女の一生」の脈絡を支える一大要素となっている。

平安時代には、死後の極楽往生を願う浄土教が流行する一方で、道から外れたものとして「狂言綺語」と呼ばれた物語も流行した。そのような時代的な雰囲気背景に、『更級日記』は、幼い頃物語に夢と憧れを持ち続けた作者が、厳しい現実に挫折し、物語によって信仰（浄土教）の世界に救いを求めようとする過程をよく示している。

『更級日記』において物語では、総八回行われるが、結婚後本格的に行われた石山詣では、父孝標を亡くした作者が、自分自身を深く反省し、この年に生まれたと思われる第一子を抱えて、ひたすら仏にすがろうとする様子が看取される。そして、この石山詣でで得られた吉兆の夢に作者は再び期待を抱く。大嘗会の御禊の日に敢行した初瀬詣では、夢の中で初瀬の観音の化身と思しき女性が現れ、作者に内裏にいるべきであると告げる。これは、二人目の子を出産したこともあり、皇子や皇女の乳母になって宮中に勤めることを望んでいた作者に大きな希望を与えるに充分であった。その後も、夢の啓示の有効性を保持しその実現を祈るものとしての物語でが続くが、作者五十一歳の時、突如おとずれた夫の死は、作者の夢や希望のすべてを無力化する。すなわち、夫の死は、作者自ら択びとった妥協の無惨な敗北だったのである。物語では、結婚しても相変わらず宮中に憧れを持ち続けた作者にとって、皇子や皇女の乳母になる夢を持たせた媒介体であったが、しかしそこで得られた夢告は何も当たらず高貴な人の乳母になれずじまいで終わるのである。

キーワード：『更級日記』、物語で、女の一生、物語、浄土教、石山詣で、夢、初瀬詣で

투 고 : 2012. 8. 31

1차 심사 : 2012. 9. 15

2차 심사 : 2012. 10. 6